

音順	方劑名 傷寒論・金匱要略条文	生薬構成 および製法・服用方法
きー5	枳実芍薬散	<p>読み および解説・その他</p> <p>枳実（苦寒）火上において少し焦げる程度に熬りて後に末とする。焦がし過ぎない様注意する。芍薬（苦平）等分上の2味を末となし、合わせて散となし、1回に2gを1日三回大麦の粥に混ぜて服用する。</p>
<p>婦人産後病脈証併治第二十一第3条（金匱要略）</p>		
<p>「産後腹痛煩満して臥するを得ざるは枳実芍薬散之を主^{つかさど}る。併せて癰腫を主どる。その場合には麦粥を以て之を下せ。」</p>		
<p>解説 産後すぐの婦人で、腹痛して、張って苦しがり、横になることが出来ないものには、枳実芍薬散が主治する。また、枳実芍薬散は、癰腫（腫れ物で熱があり、寒気があって痛むもの）にも用いる。この場合には麦粥で下すとよい。</p>		
<p>枳実芍薬散証は、血虚により裏熱を生じた場合である。</p>		
<p>枳朮湯（枳実芍薬散 - 芍薬 + 白朮）は、心下に水飲の停滞があり、血の循環が悪くなり、熱を伴うしこりを生じるもので 白朮で、中に滞っている熱を外に導く。</p>		
<p>枳実芍薬散は、血虚によって血の循環が悪くなりしこりを生じるもので、枳実で内の熱によるしこりを解きほぐす。</p>		
<p>「方劑決定のコツ」の注釈</p>		
<p>産後間もない時の腹痛は、子宮収縮不全による腹痛が一般的であるが、この条文の腹痛は、血に熱を持って血が虚し、そのために血流が悪くなって血が滞り、子宮の筋肉のしまりが悪くなったりして、腹痛を感じて苦しんで横になれない。その熱が一か所に集まると癰腫を起こす。枳実芍薬散は、その熱を取る働きがある。</p>		
<p>枳実芍薬散の枳実は、苦寒で血を涼して熱をさまし、しこりを消す。芍薬は、苦平で、筋肉の結実拘攣を治す働きがあるので、腫脹を治する薬方に多く用いられる。</p>		
<p>枳実芍薬散証</p>		
<p>新古方薬囊によれば「婦人が産後に於て腹脹りて大いに痛み、臥して横になる事の出来ぬ者に用ふ、又腫れ物があつて熱あり寒氣もありて大いに痛む者にも宜し。」と記されている。</p>		
<p>婦人産後病脈証併治第二十一第4条（金匱要略）</p>		
<p>「師曰く、産婦腹痛、法当に枳実芍薬散を以ってすべし、もし癒えざる者此れ腹中に乾血有りて臍下に着くと為す。宜しく下瘀血湯之を主るべし。亦経水不利を主る。」</p>		
<p>ま^まきに、以^もって、臍^{きいか}下^{つかさど}、主^{また}る、亦</p>		
<p>解説 師が云われるのには、産後すぐの婦人が腹痛を起こした場合には、原則として、枳実芍薬散を服用させるべきであるが、もし枳実芍薬散を服用しても腹痛が癒えないものは、腹中に乾いた瘀血があつて、それが臍下に着いて離れないからである。その様な血の滞りと熱によって生じた瘀血が臍下に着いて離れない場合には、下瘀血湯を用うべきである。下瘀血湯は月経が無い者にも用いる。</p>		
<p>下瘀血湯は、虜虫で結血を破り、桃仁で瘀血を通利し、大黄で結熱を去る。</p>		